

# 小林秀明先生のご逝去を悼む

出井 雅彦

令和2年5月30日、小林秀明先生が入院先の病院にて、59歳でご逝去されました。

3月初めに、突然息苦しさを訴え、緊急入院されて3ヶ月、必死の闘病もむなしく、帰らぬ人になりました。今に思えば、入院の数ヶ月前から酷く咳き込む姿をしばしば目にしていました。しかし、咳ぜんそくと言う診断でしたし、授業も学生の卒研指導も全く普通にこなしていましたので、特に心配してはいませんでした。実際、入院の一週間前にも、前職の同僚達と山中湖の温泉に出掛け、全く元気そうでした。それから僅か一週間後、苦しそうな声で、急に息が出来なくなった、救急車を呼んでいる、と自ら電話を掛けてきました。短いやりとりでしたが、普通に会話ができたのはこれが最後となりました。入院の時点で、すでに肺の状態はかなり悪く、直ぐに気管挿入の措置が施され、それ以来会話がほとんどできない状態になってしまいました。また、新型コロナウイルスの感染が拡大し始めていたため、最後までお目に掛かる機会が得られませんでした。

小林先生は本学に着任してまだ3年でした。それ以前は、慶應義塾女子校で生物の教員として30年間務められ、教科指導、学生指導、クラブ活動、そして管理的校務にも関わってきました。さらに、高校「生物」・「生物基礎」、中学「理科」などの教科書の執筆や、NHK教育テレビ高校講座「生物」・「理科総合B」などを担当するなど、広く理科教育に貢献されていました。こうした豊富な教育経験と論文等の業績が評価され、本学に着任されました。小林先生は、私は高校教員としての仕事は十分やってきた、これからは自分がかつてそうであったように、教員を目指す大学生に対して、教科教育や卒業研究を通して、教員としての資質を磨く手助けをしたい、と常々仰っていました。卒業と同時に教員となる多くの学生にとっては、小林先生の指導は実践に繋がる大きな力になっていたことは想像に難くないことです。着任して3年、大学の仕事に慣れ、学生の気質も理解し、大学教員としてやりたことが出来そうだと思っていた矢先だったに違いありません。残りの10年、学生にどんなことを教え、何を残そうかと、様々な希望と計画があったに違いありません。

小林先生は、穏やかで、親しみやすい性格でしたので、年齢を問わず沢山の山の人から愛され、可愛がられ、充実した日々を過ごされていることは、傍目にもよく分かりました。仕事も厭わず、頼まれれば嫌な顔一つせず引き受けてくれました。それに甘え、私も大学の仕事ばかりか学会の仕事も沢山お願いしていました。小林先生とはプライベートでのお付き合いも深く、これからも一緒に楽しい時間を持つものと思っていました。まさか、こんなにも早くお別れを言うことになろうとは夢にも思っていませんでした。「順序が逆だろう」と嘆く私に、先生は、「精一杯仕事をしました、家族との時間も楽しみました、いろんな所に旅行しました、美味しいものも一杯食べました（特に鰻）、スキー、落語に俳句、友人との語り、人一倍楽しいことを沢山しましたよ」と言っているに違いありません。

理科専修では、3月に卒業式が出来なかった卒業生に向け、自筆のメッセージを送ることになりました。その時小林先生は既に入院中で食事も出来ず、声も出せない状態でしたが、「一本でも多く「笑いのしわ」を残せる人生を送って下さい」と書いた自筆のメッセージを送ってくれました。この言葉に、私は胸が締め付けられると同時に、小林先生のこれまでの人生が、如何に充実し幸せな日々であったかを強く感じました。病床にありながらも卒業生の将来を想い、自分のように笑いの絶えない、明るく楽しい人生を送って欲しいという心のもった一言でした。この一言は、私にとっても卒業生にとっても

宝物です。

私にとって小林先生は、同僚であり、かけがえのない後輩であり、無二の友とも言える存在でした。今となってはどうすることも出来ませんが、小林先生が残した足跡、学生への思いやりの心、共有した楽しい日々は消えることはありません。小林先生、本当にありがとうございました。天国でも笑い溢れる安らかな日々であることを心からお祈りしています。合掌

(いいでい まさひこ 文教大学教育学部理科専修)

(おことわり)

小林先生の経歴・主要業績につきましては、本誌掲載を割愛させていただきます。

(紀要委員会)